

総特集

本人を真ん中に“チーム”で 意思決定を支える アドバンス・ケア・プランニング

S P E C I A L F E A T U R E

2018年3月に改訂された「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」(厚生労働省)においてアドバンス・ケア・プランニング(ACP)の実践・普及が明文化されました。また、2018年度の診療報酬・介護報酬の同時改定において、ガイドラインに沿った対応を行うことが在宅ターミナル加算などの算定要件に盛り込まれ、ACPの重要性がよりいっそう認識されるようになりました。

ACPは、患者・家族・医療従事者の話し合いを通じて、患者の価値観を明らかにし、これからの治療・ケアの目標や選好を明確にするプロセスです。そのプロセスの中で、患者に最も近い存在としてケアにかかわる看護職は重要な役割を果たします。

本臨時増刊号では、ACPの基本的な考え方を解説した上で、「本人を真ん中に置いた意思決定支援」について考えます。看護職がどのようにACPを進めていけばよいのか、ケアにかかわる多職種がどのように連携してバトンをつなげていくのか、実践事例にてそのプロセスを示します。

看護

臨時増刊号

2019年6月 第71巻 第8号

日本看護協会機関誌

Journal of the Japanese Nursing Association June 2019 Volume 71 / Number 8

総特集

本人を真ん中に“チーム”で意思決定を支える アドバンス・ケア・プランニング

緒言

「最期まで自分らしく」を支える

熊谷 雅美 004

1章 解説 ACPの基本的な考え方・看護職の役割と視点

1-1 ACPの基本的な考え方とガイドライン解説

木澤 義之 008

1-2 ACPにおける看護職の役割と視点

宇都宮 宏子 015

1-3 ACPと倫理

竹之内 沙弥香 024

1-4 ACPと法

福田 直之 031

2章 事例 本人の意思決定を支える

2-1 慢性心不全患者へのACP支援

高田 弥寿子 038

2-2 地域医療機関を巻き込み ACP相談員を育成

山田 洋子・渡邊 啓介 045

2-3	がん治療の早い段階から継続的に話し合いを重ね、患者に寄り添い続ける ACP	江口 恵子	051
2-4	ACP を地域へ周知しながら院内活動を推進	千葉 恵子	059
2-5	小児 ACP の運用と実践	佐藤 麻由果・秦 裕美・田邊 三千世	065
2-6	非がん高齢者の最期の願いをめぐる意思決定支援	藤田 愛	071
2-7	在宅での看取りにおける ACP 支援	田中 美樹	078

3章 提言 ACP を地域の文化に

3-1	患者・家族から望むこと	金子 稚子	086
3-2	ACP の愛称は「人生会議」	鈴木 美穂	090
3-3	町全体で患者を中心とした医療の実践 ACP の普及に向けて	塩田 美佐代	092

4章 関連資料

4-1	人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン	厚生労働省	100
4-2	平成 29 年度 人生の最終段階における医療に関する意識調査結果(確定版)	厚生労働省	108

ACPの基本的な考え方と ガイドライン解説



木澤 義之

神戸大学医学部附属病院緩和と支持治療科 特命教授

「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」の改訂ポイントを解説するとともに、医療現場でのアドバンス・ケア・プランニングの現状と課題について述べ、その基本的な考え方と意義についてご紹介いただきます。

2007年度「終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン」(2014年度に「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」に改称)の策定から約11年が経過し、今回、2017年度「人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会」において、わが国の現状と今後のあり方を踏まえてガイドラインの見直しの必要性が提起され、2018年「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」(以下：ガイドライン)に改称、改訂が行われました。

2007年版ガイドラインの概要

厚生労働省では、1987年から約5年ごとに「人生の最終段階における医療」に関する検討会が設

置されています。2007年の検討会では、射水市民病院における人工呼吸器の取り外し事件の報道を発端に「尊厳死」のルール化の議論が行われ、患者に対する意思確認の方法や医療内容の決定手続き、生命維持治療の中止や差し控えについての標準的な考え方を整理し、「終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン」が策定されました。このガイドラインに流れる考え方は次の3点です。

- 1) 患者本人による決定を基本とすること
- 2) 人生の最終段階における医療の内容は、医療・ケアチームによって、医学的妥当性と適切性を基に慎重に判断すること
- 3) 可能な限り、疼痛やその他の不快な症状を十分に緩和すること

具体的な内容は以下のように集約できます。

- ① 患者の意思決定能力を慎重に判断する
- ② 患者の意思が確認できる場合(意思決定能力が十分な場合)には、患者と医療従事者とが十分な話し合いを行い、患者が意思決定を行う
- ③ 説明は、時間の経過、病状の変化、医学的評価の変更に応じてその都度行う
- ④ 患者の意思が確認できない場合(意思決定能力

が十分でない場合)には、家族が患者の意思を推定できる場合にはその推定意思を尊重し、患者にとっての最善の治療方針をとることを基本とする

- ⑤患者・医療従事者間で妥当で適切な医療内容について合意が得られない場合等には、複数の専門家からなる委員会を設置し、治療方針の検討および助言を行うことを必要とする

2018年3月のガイドライン改訂の経緯と変更点

「人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会」での議論から、1) ガイドラインは2007年の策定以降10年間、内容の見直しがされていないこと、2) 診療報酬と介護報酬の同時改定のタイミングに「看取り」が大きなテーマとして取り上げられていたこと、高齢多死社会の進行に伴い、地域包括ケアシステムの構築に対応したものとする必要があること、3) 英米諸国を中心として、アドバンス・ケア・プランニング(advance care planning、以下：ACP)の概念を踏まえた研究・取り組みが普及してきていることなどを踏まえて見直しが提起されました¹⁾。

改訂の概要は、以下の5点に集約されます。

- 1) 病院だけでなく、在宅医療・介護の現場で活用できるよう、名称が「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」に変更されたこと：患者・家族と話し合う多職種チームに「介護従事者が含まれる」ことを明確化するため、今まで表題や本文において「医療」とされていたものを「医療・ケア」に変更し、「患者」という言葉も、すべて「本人」という表現に変更されたこと

2) 心身の状態の変化等に応じて、本人の意思は変化し得るため、医療・ケアの方針や、どのような生き方を望むか等を、日ごろから繰り返し話し合うこと(ACP)の重要性が強調され、推定意思の質を高めることがACPの大きな役割であることが示されたこと

3) 本人が自らの意思を伝えられない状態になる前に、本人の意思を推定する者について、家族等の信頼できる者を前もって定めておくことの重要性が記載されたこと

4) 単身世帯が増えることを踏まえ、家族だけでなく親しい友人等を含めた「家族等」が、本人の意思推定者であることを示されたこと

5) 繰り返し話し合った内容をその都度文書にまとめ、本人、家族等と医療・ケアチームで共有することの重要性が記載されたこと、です^{2,3)}。

010ページ

図表1に、ガイドラインの概要を示します。

ACPとは？

ACPは「患者・家族・医療従事者の話し合いを通じて、患者の価値観を明らかにし、これからの治療・ケアの目標や選好を明確にするプロセス」であり、その過程においては、身体的なことに留まらず、心理的、社会的、スピリチュアルな側面を含むこと、治療やケアの選好は定期的に見直されるべきであること、代理決定者(本人が信頼していて、意思決定能力がなくなった場合に本人の代わりに医療やケアについて話し合ってもらいたいと考えている人もしくは人々)の選定や医療・ケアの選好などの話し合いの結果を文書化してもよいことなどが重要であるとされています⁴⁾。

近年、諸外国において、たとえ意思決定能力がなくなった後でも、患者の意向が尊重された形で

看護 臨時増刊号

6 June
2019

Volume 71 Number 8

日本看護協会 機関誌
Journal of the Japanese Nursing Association

発行・発売 2019年6月5日

発行所 株式会社日本看護協会出版会
東京都渋谷区神宮前 5-8-2 日本看護協会ビル 4階
Tel. 0436-23-3271 (コールセンター：ご注文)
振替 00190-8-168557
東京都文京区関口 2-3-1
Tel. 03-5319-8017 (編集直通)

発行人 井部俊子

編集委員 勝又浜子／橋本美穂／森本一美／長田晋一／伊藤雄介(日本看護協会)

アドバイザー委員

(五十音順) 角田直枝(茨城県立中央病院)・佐藤美子(川崎市立多摩病院)・
塩田美佐代(湘南医療大学)・杉原幸子(君津中央病院)・
鈴木恵美子(横浜メディカルグループ本部)・田巻宏之(医療法人社団碧水会長谷川病院)・
中島美津子(東京医療保健大学／大学院看護学研究科)・
東めぐみ(日本赤十字北海道看護大学)

編集 中島祥吾

編集協力 石川奈々子・株式会社自由工房

表紙イラスト 三報社印刷株式会社

表紙デザイン 新井田清輝

印刷 三報社印刷株式会社

定価 本体 2,000円 + 税